

不安と緊張を抱えてその村に始めて入った2002年の4月。乾季が終わり雨を誰もが今か今かと心待ちにする季節。農村に暮らす人々にとっては、種まきのタイミングを経験から推し量る季節。気温、雲の動き、日の長さ、動植物たちの動向、これまでの経験、ありとあらゆる動きを読み取っていく。日頃天気予報に頼ってきた生活をしてきた私にとって、ケニア人は一人一人がまるで気象予報士のように「すごい分析力だな」と感心したものだ。

その村とは、首都ナイロビから北上して車で2時間くらいの場所にある都市二エリというところからさらに車で30分ほどあるキアカンジャという村である。村は地図に名前が載っているわけでもなく、観光客ならその先の国立公園への通過地点として通りすぎてしまうだろう。きっと私も一生その存在を知ることなく、意識することもなかったような小さな村である。もし、私がこの村で生まれ育った今のケニア人の旦那とナイロビで出会わなければ。

ここを訪ねることになったのは、彼との結婚の挨拶に出掛けることになったからである。いつものように村をぶらっと興味にまかせて訪ねる

のとは勝手が違う。私の不安は、外国人である私が受け入れるられるか、またどのように受け止められるかという心配からきていた。自分の文化を大切にしている民族であることは、理解しているつもりだ。

ナイロビを出発して3時間あまり、目的の村に着いた。キクユ族と呼ばれるケニア最大部族のホームグラウンド。店先からはキクユ語の音楽が流れ、農耕民族らしく畑で作業する人々があちこちで見受けられる。人々の会話は、ナイロビのように英語やス

ワヒリ語ではなくてキクユ語のみである。

車が着いて家を出迎えてくれたのは、彼のお父さんの祖父母、両親、弟7人と妹1人の総勢12人。ひとつ屋根の下暮らす家族たちだ。第一印象は、全員が笑顔だったことだ。私の手を引いて、どうぞどうぞと中へと誘ってくれる。居間のソファに腰を下ろすと、暖かい紅茶が出てきた。挨拶を一人一人と交わす。終始誰もが笑顔だ。言っていることは分からないが、ようこそという気持ちが笑顔から伝わってくる。



お母さんと

家族の紹介が終わると、次は動物の紹介だ。敷地内で飼っている牛、ヤギ、ウサギ、鶏など。名前こそ付いてないが、大切に育てられているのが分かる。そして、家の後ろにある畑にある野菜や果物を紹介してくれる。彼の家は、おじいちゃんの代からのコーヒー農家であり、コーヒーの赤い実をさみを使って採る方法を教えてくれた。そしてもう一つの30分ほど歩いたところにある畑へ連れて行ってもらう。そこは、豆や野菜などの毎日の家族の食生活を支えるため用のものが育てられていた。今日食べる分だけの野菜を収穫する。じゃがいも、にんじん、たまねぎ、ねぎ、トマト、キャベツ、さつまいもなどを一緒に収穫した。



台所で家族と

お母さんは終始歌を歌い、妹は小枝などの薪になるものを集めつつ、野菜を採っていく。お父さんは、牛に食べさせるネピアという草を刈っていた。家族全員での作業。1時間も畑にいと私は普段は使わない筋肉のあちこちが痛くなってきて、ペースが落ちていた。するとお母さんは、「無理しないよ。あなたはあなたが出来ることをやっていけばいいのだから」とたどたどしい英語で話しかけてくれた。その時の優しい瞳は、私の緊張をほぐすのに十分だった

と思う。畑から家までの帰り道、野菜で重くなった籠を背負いつつ、村に住むいろいろな人に声をかけられる。ほとんどが、「よく来たね。後で挨拶に行くからね」と言ってくれている。

そして、夕食の準備をお母さん、妹そして私の3人でとりかかる。お母さんは、一番大きな鍋でご飯を炊く。妹と私は「一体何人分？」と疑いたくなるほどの野菜をひたすら切る。じゃがいもやにんじんの皮だけでも50個以上は剥いたのだろうか？そして、お父さんと弟たちは裏でウサギをしめていた。ウサギが死ぬ間際に出す低い「キュ」という声が出た。一年に数回しか食べない肉が今夜料理されることで、みんながわくわくしている様子が伝わってくる。しかし、すごい量だ。家族の人数分をはるかに超えて、40～50人分くらいはあるだろうか。

夜も更けて、暗い台所で唯一の明かりである鍋の下で揺らめく火を囲む。鍋が煮えるまで家族で今日あったことなど話す。冗談や歌や、とめどなく会話が弾む。兄弟たちは、学校で習った英語で通訳してくれる。そして、一緒に踊り歌いよく笑った。もうずっと前からこの家族を知っていたような気にさえなる。だれもが笑顔で、リラックスしている夜。食事が出来る頃、居間へ移動してみるとランプのあかりの向こうにすごい人数の人が座っているのが見えた。20名くらいはいるだろうか？目を良く凝らしてみると、昼間すれちがって、行くからねと言っていた近所の人達だ。一緒にご飯を食べる。いろいろな会話を交わしながら、新しい人が来ては、帰りの繰り返し。自己紹介だけでも50回以上はしたと思う。

更に夜も更けると、旦那の同級生などの友人達が中心になってくる。ナイロビなどの都市で教育を受けた彼らは英語が上手だ。村の歴史や伝統、今後どうこの村を発展させていきたいかなど、いろいろな話をしてくれる。結局深夜2時ごろまでいろいろな人と話し、眠ったのは3時ごろであった。一日で、彼の家族に、親戚に、近所の人々に、友人たちのほとんどに会い、話をし、しかも前から知っているような感覚にもなったことへの驚きと喜び。朝からの心配や不安はなく、心地よい疲れと眠りについた。木のざわめく音以外は何もしない静かな夜とは対照的だった人々の明るい声と笑顔が心に刻まれた。



野菜畑

朝、鳥の泣き声で目が覚めると、台所から煙が出ていたので入ってみるとお母さんが朝食の準備をしていた。

「よく眠れた？昨日は初めてあなたに会えて家族全員がうれしかった。親戚の人達も村の人全員が同じ気持ちですよ。あなたを導いてくれた神に感謝しているのよ」と言ってくれた。そして熱々の紅茶の入ったコップを渡してくれる。「なんでも話してね。家族なのだから」と。私は、「私が日本人であってキクユの人でないことを気にしますか？」と聞いてみたかったけど、そんなことは考えもしていないようなお母さんの言葉に言葉を飲み込んだ。

その日は、一日かけて私の歓迎会が開かれた。遠方からも親戚が集まり、100名くらいの人々が集まった。私がどういう人であるかと紹介するというよりは、「ようこそ」という気持ちがひしひしと伝わってくる温かい会であった。3日の滞在中で触れ合った人々はきっと150名くらいだろう。そこでもらった歓迎と笑顔は私をきっと忘れることはないだろうと思う。新しい故郷が出来たと感じるには十分な触れ合いと時間だったと思う。

今、あれから4年あまり。私たちは遠く日本にいる。私のほうがホームシックなくらいに家族や村の人々との時間を思い出す。お父さんは、私が帰ったあと親戚一人一人に私のことを「新しい娘をこれからよろしく。慣れないこともあるだろうから」と挨拶してまわり、お母さんは、小学校のときに使っていた英語の教科書を出してきて英語の勉強をしていると聞いた。次に会うときにはもっと英語を上手に話したいと言っていた言葉通りに。

弟達は、私が植えた野菜に毎日水をやってくれているらしい。私がかわいいといったヤギが大きくなり、最近子供を3匹生んだそうだ。1匹は売らずに私のために家で飼うことにしたと聞いた。妹は、私が教えてあげた日本語の歌を学校の友達に教えてあげる活動をしているそうだ。いつか私がまた来たときにみんなで歌ってくれるそうだ。

だれも、外国人であるとか日本人であるとかで私を見ることはなかったように思う。もちろん違いはあることはお互い理解している。

国際交流、異文化交流、国際理解などいろいろな名前があり、私が学生のころにはなかった学校のカリキュラムやイベントもたくさんある。私たちの団体も小さいながらいろいろなイベントに参加させてもらっている。そこでのさまざまな出会いを通じて感じることは、人と人が繋がるためには「その存在を愛し、愛されること」の繰り返しではないかと思う。その存在とは、結局「私」であって「国籍や人種」ではないのではないかと、ケニアの家族が教えてくれているような気がする。